

The Reminiscence of Exellia NG+1

混沌の始まり

作成レギュレーション

基本概要（新規／継続）

- ・ 経験点：133500 / 145000 点
- ・ 資金：243000 / 267000G
- ・ 名誉点：1500 / 1800 点
- ・ 成長回数：251 回
- ・ レベル制限：13
- ・ アイテムレベル制限：武器ランク S 以上
推奨：防具ランク S 以上
- ・ ステータスリミット：各項目ボーナス 13（+増強増分 1）まで

制限事項

- ・ ヴァグランツ、蛮族 PC 禁止
- ・ SW2.0 / 2.5 標準流派入門・使用禁止
- ・ 武器防具強化に関する特殊制限
- ・ シナリオの成長回数が 10 以上のとき、60%以上の偏重割り振りの禁止

動画用メモ

コンラートの古遺跡

Multiverse Designer で作成したものをスクショする。

その他メモ

コンラートの古遺跡

- ・ Multiverse Designer あたりに作成したい
- ・ 仮組みは Excel 方眼で済ませる。

依頼：コンラートの古遺跡の探索

- ・ 依頼主：ジェフリー・ブリアンス
- ・ 依頼内容：コンラートの古遺跡の探索
- ・ 依頼文：

コズミック・キューサー・キラーたる冒険者たちに依頼したい。依頼の内容は、ネバーウェア関門街の付近にある遺構、通称「コンラートの古遺跡」の探索だ。

彼の遺構には、冒険者に護りの加護を与えるとされる。しかし、その内容が分からないというのが実情だ。君達を実験台にするようで申し訳ないが、頼めるだろうか？

導入

光の加護が封じられてから、数週間。

君達は、依頼をこなしつつも、己に満ちていた力が失われたことを痛感していた。

光に突き立てられた牙は、その加護を阻み、その護りを弱々しくしていた。

(※GMメモ：RP待機)

そんな折に、エメリーヌがクエストボードに1枚の依頼を貼り付ける。

内容を確認すべきだろう。

(※GMメモ：「その他メモ-依頼：コンラートの古遺跡の探索」開示)

(※GMメモ：RP待機)

君達がそれを手に取ると、イリヤと遊星が声をかける。

イリヤ

「そういえば、あなた達って、身体の調子は大丈夫なの？」

遊星

「言っちゃあなんだが、コンラートの古遺跡は『光の加護』がないと難しいのだが」

(※GMメモ：RP待機)

困り果てた君達の元に、エメリーヌが来る。

エメリーヌ

「いいえ、コンラートの古遺跡は『護りの加護』を与える遺跡よ。一応は、彼らに向かわせて問題ないはずなの。一応、あなた達もバックアップについていてもいいけど…、入口の外までね」

そう言って、エメリーヌは君達に有無を言わせず受諾させるだろう。

更に、彼女は無理難題を突きつけてきた。

——アイテムや加護を用いずに踏破しなさい。

コンテンツ解放：守護遺構 コンラートの古遺跡

一方、災禍の根源

一方、龍姫公陣営——

龍姫公

「…聖竜フレスヴェルグとは決裂した…。帝竜ニーズヘッグも、私には賛同しないときたもんだ…。さて、ルーカス。今度は何を喰わせてくれるんだ？」

龍姫公は真っ先に、『次の蛮神』について訊く。

ルーカス

「渾玉の間に住まうという、ブーニベルゼ…。それを喰らえさえすれば、あなたの力は盤石なものになるでしょう。それに、『宙準星の巫女』は現在、外交のために外出しているようなので、我々への注目は少ないでしょう」

龍姫公

「そうか。なら発つとしよう。私達の手で、ブーニベルゼを討ち、それを喰らう。今回の目的はそうであるとして」

龍姫公の口角が上がる。そこに、尋常ならざる憎悪を、ちらつかせながら。

守護遺構 コンラートの古遺跡

その古遺跡では、長らく『光の神』を主神とする特殊な宗教があったという。

しかし、300年前の《大破局》を機に、その信仰は廃れ…。今は、踏破せし者に加護を与えるだけの場所となっていた。

光の加護の疑似再現、とも言われる『魔法』が敷かれたそこは、魔法を多く使う場所である為なのか、信じられないほどのエーテルが満ちていた。

(※GMメモ：RP待機)

エメリーヌ

「私達がいけるのはここまでよ」

(※GMメモ：RP待機)

遊星

「仮に、俺達が入ってしまった場合はどうなるんだ？」

エメリーヌ

「英雄であるあなたには分からないかもしれないけれど…、この中では恐ろしいほどに強い敵が襲ってくるのよ。あなたの基準であれば…、そう、『ネオ童実野シティを守る際に障壁となった男』の『切り札』と同じような力の」

その言葉を聞き、遊星は腕を組む。

(※GMメモ：RP待機)

遊星

「…Z-ONE の、《究極時械神セフィロン》か…」

エメリーヌ

「アレがわんさか湧くようなものよ」

そのとき、君達は頭痛に苛まれる。

これまでとはレベルの違う頭痛だ。

(※GMメモ：RP待機)

なんとか頭痛に耐え、辛うじて目を向けると…、そこには、《《静止した》》エメリーヌたちの姿があった。しかし未だに…いやさらに、頭痛が続く。

???

『来たれ…』

(※GMメモ：RP待機)

君達が訴えかけるように言うと、急速に空間が歪んでいく。

???

『来たれ、神懸りし英傑よ…』

<hr>

君達が気付くと、そこは建物の中であるようだった。

光神教の信徒

「来たりませ、光の英雄よ。来たりませ、神懸りし英傑たちよ」

その部屋の周囲では、ローブ姿の信徒たちが『光の英雄』たちに信仰を捧げているようだった。

(※GMメモ：RP待機)

明らかな異常。君達の中の嫌悪感が、明らかにその信仰を疎んでいた。

君達は彼らに話しかけ、それを止めるように言うことになる。

(※GMメモ：RP待機)

光神教の信徒

「ああ、光の英雄様！我らの祈りを、聞き届けてくれたのですね！

ああよかった…本当によかった。英雄様、我らの願いを聞き届けてくれたまえ。この災禍を、蛮族たちが起こした災禍を、払い除けてくださいませ…！」

…話が通じない。

どうやら君達は、『コンラートの古遺跡の過去』に、飛ばされてしまったようだ。

コンラートの古遺跡・過去

君達は、コンラートの古遺跡の中を探索する必要がある。

探索（スカウト観察）判定 目標値：25

成功時、イベント発生

（※GMメモ：追加イベントここから）

光神教の信徒

「ああ、光の英雄様！我々に何か御用があるのですか？」

PC への選択肢

- ・ あなた達は何者だ？
- ・ ここではどんなことをしている？

（※GMメモ：RP 待機）

（※GMメモ：「あなた達は何者だ？」ここから）

光神教の信徒

「我々は光の英雄様を呼び起こす、光の神を信奉するものたち。特に不思議がる必要はありません。あなたがたはただ、外で荒れ狂う蛮族どもを退ければよい。ささ、行ってください。あなた達の役目に従うのです」

（※GMメモ：「あなた達は何者だ？」ここまで）

（※GMメモ：「ここではどんなことをしている？」ここから）

光神教の信徒

「我々はここで、光の神に祈りを捧げています。力を失いつつある光の神に祈りを捧げ、その力を復活させたいと願っているのです。私が話せるのはこの程度です。ささ、行ってください。あなた達の役目に従うのです」

（※GMメモ：「ここではどんなことをしている？」ここまで）

光神教の信徒

「私達は責務を果たしました。あとは祈るのみです」

その言葉を最後に、彼らは君達が話しかけても応じなくなるだろう。

(※GMメモ：追加イベントここまで)

(※GMメモ：RP待機)

君達は、一度コンラートの古遺跡の外に出る必要がある。

いやそもそも、ここは「コンラートの古遺跡」という名でされているのか？

君達は疑念を抱きながら、外へ出た。

入口付近の…否、頭痛に苛まれる前に、エメリーヌたちがいた場所に、看板があった。

(※GMメモ：RP待機)

(※GMメモ：「魔動機文明語の読文」を持つPCがいる場合のみ ここから)

そこには、魔動機文明語でこう書かれていた。

「魔法王コンラートの魔科学研究所」と。

(※GMメモ：「魔動機文明語の読文」を持つPCがいる場合のみ ここまで)

そのとき、足音が聞こえる。振り返ると、蛮族が数体いた。

(※GMメモ：RP待機)

??? (汎用蛮族語)

『ケケケッ！ヒトだ！ヒトだァ！』

『コロセ！奴をコロセ！食らいつくせ！』

敵：トライアンフ・ハイゴ布林×6、トライアンフ・ハイゴ布林ファナティック×1、
トライアンフ・ハイゴ布林メイデン×1

君達は蛮族を倒した。

いや、『君達の視点では』倒したのだろう。

しかし後ろで、悲鳴が聞こえる。例の施設で、なにかあったのだろう。

(※GMメモ：RP待機)

君達は、急いで来た道に戻った。

光神教の信徒

「え、英雄様はまだか!？」

「そ、それが…、外の蛮族共に倒され——ぎゃあ!!」

信徒たちが、次々になぎ倒されていく。

蛮族の一体が、信徒の心臓を喰らう。

君達存在に気付いたのか、その蛮族は言葉を口にする。

蛮族（汎用蛮族語）

『見つけたぞ』

そう言った蛮族は何かを唱えると同時に、時化に包まれる。

(※GMメモ：RP待機)

その時化に吞まれる形で、君達はこの時代を後にした。

コンラートの古遺跡・現在

君達が頭痛から醒めると、そこは朽ちた遺跡の中だった。

エメリーヌ

『大丈夫!? 倒れたと思ったら、急に転移魔法が君達に発動して…』

(※GMメモ：RP待機)

先ほど見た入口であるようだが、そこにあるべき入口の扉がない。

どうやら、遺跡の中に閉じ込められたようだ。

(※GMメモ：RP待機)

君達は、探索をすることになる。

入口

探索（スカウト観察）判定 目標値：25

聞き耳（スカウト観察）判定／部屋全体 目標値：25

聞き耳（スカウト観察）判定／北側・南側ドア 目標値：23

聞き耳（スカウト観察）判定／東側ドア 目標値：25

北側、南側、東側に扉があり、うち東側の扉は強力な魔法がかかっているようだ。

探索判定成功：不自然に残った死体

埃が積もった死体がある。異臭を放っておらず、また血も一滴たりとも流していない。

褪せた瞳や、こわばった表情から、ここになにか恐ろしいことが起こっていたのだろうとすることが想像できる。

部屋全体聞き耳成功：不自然に静まりかえった部屋

何も聞こえない。外で話をしているエメリーヌたちの会話が聞こえるくらいに静かだ。

ここは、頭痛の最中に見た場所と同じなのだろうか？

北側ドア聞き耳成功：風の音

風が吹く音が聞こえる。この扉の先は、空間として存在しているようだ。

南側ドア聞き耳成功：水がしたたる音

水がしたたる音がする。雨漏りをしているのだろうか。だが確実に、この扉の先に空間があることが分かった。

東側ドア聞き耳成功：謎の音

クリスタルの反響音のような音が聞こえる。扉には魔法的な封印が施されているようで、まだ魔動機文明語で何か書かれている。

（※GMメモ：「魔動機文明語の読文」を持つPCがいる場合のみ ここから）

扉には、「星極と霊極を縛る秘石を解き、結界を制する機構を破壊せし者にのみ、この扉は開かれる」と書かれていた。

(※GMメモ：「魔動機文明語の読文」を持つPCがいる場合のみ　ここまで)

通路（入口←→偏風石の間）

探索（スカウト観察）判定　目標値：25

聞き耳（スカウト観察）判定　目標値：23

室内だというのに、風が激しく吹いている。

探索判定成功：整然と並ぶ機械

壁面に、整然と並んだ機械があった。どうやら、風はこれから吹き出しているようだ。
300年経ったというのに、未だに正常に稼働していることが不思議になるほどだ。

聞き耳成功：機械の風とは別の風の音

機械が吹き出す風とは別の、風の音が聞こえる。
風に絡む魔物の類がいるのだろうか…。

偏風石の間

君達は、偏風石の間に辿り着いた。
そこには、風を纏った魔法生物がいた。

(※GMメモ：RP待機)

それが君達を認識すると、有無を言わず襲いかかってくるだろう。

敵：コンラート・ウインドファミリア

君達は、魔法生物を打ち倒した。奇声と言うべき断末魔を上げ、魔法生物は消滅する。
しかし、戦闘の影響か…、部屋は荒れ、探索のしようがなくなっていた。
とはいえ、やるべきことは決まっている。

探索（スカウト観察）判定　目標値：25

聞き耳（スカウト観察）判定／部屋全体　目標値：25

聞き耳（スカウト観察）判定／東側ドア　目標値：25

探索判定成功：荒れた部屋

部屋は戦闘によって荒れ、探索の意味さえなくなっているようだ。

しかし、部屋の隅に、なにやら緑色のスイッチがあった。

押すことで、何かが起こるかもしれない。

部屋聞き耳成功：機械の駆動音

ここまで部屋が荒れているのに、未だに機械の駆動音が響いている。

衝撃に強いのだろうか。

東側ドア聞き耳成功：放電音

奥から放電するような音が聞こえる。

偏雷石の間

君達は、偏雷石の間に辿り着いた。扉は、入ってきた方向のものとは別に、東と南と北方向の3方向にあるようだ。部屋全体に放電音が響き渡っており、聞き耳を立てることはできなさそうだ。

また、南北のドアは強固な封印が成されており、簡単には開きそうにない。

探索（スカウト観察）判定 目標値：25

探索判定成功：紫色のスイッチ

部屋の片隅に、紫色のスイッチがあることが分かる。

壁に、1枚の張り紙がある。魔動機文明語で書かれている。

魔動機文明語の張り紙

『光の英雄へ。星極に挑みたくば、風、雷、炎の秘石を起動せよ』

通路（偏雷石の間←→偏炎石の間）

通路が油塗れになっている。

生理的に嫌悪を抱くようなギトギト具合で、この部屋で探索をしたくはない。油塗れになることなく走り抜けるには、冒険者+敏捷度ボーナスで判定をする必要がある。

冒険者+敏捷 B 目標値：23

失敗時、次の戦闘終了まで「油塗れ」を付与する。

偏炎石の間

その部屋には、異様なほどの炎が巡っていた。
そこで佇む影は、どこか『火の召喚獣』を彷彿とさせた。
それが君達に気付き、振り返る。

そして、その存在は君達に牙を剥いた。

敵：フェイクイフリート

君達はフェイクイフリートを倒した。

(※GMメモ：RP待機)

部屋を見渡し、即座にスイッチを押す。

施設の声

《星極性の秘石が解放されました。守護霊防衛プロセス、フェーズ2に移行》
《液化炎を解放します》

その言葉と同時に、部屋の中央に火柱が立つ。
そこにいたのは…液体の炎だった。

敵：リクイドフレイム

君達は敵を殲滅した。
南側にドアがあるのを視認するが、土砂によってその先が埋まっているようだ。

通路（入口←→偏水石の間）

水に濡れている。
不自然なほどに、水に濡れている。
この状況では、探索なんてまともにしようものなら後日風邪がいいところだろう。

偏水石の間

君達が偏水石の間に入ると、異様な光景を目にすることになる。水を運んでいたのであろう、パイプの群れが爆ぜていた。

ここまで水が流れていては、探索のしようがない。しかし、水色のボタンが、壁面に取り付けられていた。

通路（偏水石の間←→偏氷石の間）

冷気が伝わってくる。

そして、何かがいることが直感で分かる。

危険感知判定 目標値：25

成功時、先制判定に+4 のボーナス修正を得る。

偏氷石の間

君達は、凍る通路を抜けて偏氷石の間に入った。

そこには、氷を纏ったなにかがいた。

そのとき、通話の耳飾りに通信が入る。

エメリーヌ

『聞こえる？そこに、疑似氷神シヴァと同じ反応の存在がいるわ。…前任者、と言ったところかしら、殺意を剥き出しにしていると思うわ！』

その言葉通り、封を破って君達に襲いかかってきた。

敵：ヘイトリッド・オブ・フロスト

君達は氷の憎悪を討ち滅ぼした。

その時、施設の通知が響く。

施設の声

《守護機構・氷、継戦能力を喪失。霊極性防衛プロセス、フェーズ2に移行》

(※GMメモ：RP待機)

案の定、南北のドアは強固な封印が施されているようだ。
また、それとは別に青色のスイッチがある。

偏土石の間

土属性のエーテルが蔓延しているようだ。
また、部屋のスイッチを押していこう。
すると、どこかで機械が止まる音がした…。

星極石の間

君達は、風、炎、雷の封を解いた。
それによって解かれた、偏雷石の間北側の扉を開けて進むだろう。

そこには、悍ましいほどの闇が湧き出していた。
そこにいた、クリスタルを抱えた魔法生物は、君達を視認すると叫びながら襲いかかってきた。

(※GMメモ：RP待機)

敵：コンラート・アーリマン

君達は、魔法生物を倒した。
よく見ると、部屋の奥にはしごがある。
そこを登っていくと、黒いスイッチがあった。

(※GMメモ：RP待機)

それを押すと、どこかで鈍い音がした。

霊極石の間

君達は、水、氷、土の封を解いた。
それによって解かれた、偏氷石の間南側の扉を開けて進むだろう。

そこには、溢れんばかりの光が満ちていた。
その光が収束し、1体の魔法生物を形成する。

それは、君達を同族にするべく襲いかかってきた。

敵：コンラート・ライトゴーレム

君達は魔法生物を打ち倒した。よく見ると、部屋の奥に下向きの螺旋階段があった。
そこを降りていくと、白いスイッチがあった。

(※GMメモ：RP待機)

それを押すと、どこかで鈍い音がした。

星極と霊極の封が解かれたとき
すると、警告音が鳴り響く。

施設の声

《星極と霊極の秘石が解放されました。光耀加護防衛プログラム、フェーズ3に移行。
霊玉の間に召喚獣を召喚。アルファウェポン、解放…》

(※GMメモ：RP待機)

どうやら、何かヤバいことが起きそうだ。

施設の声

《対蛮族用召喚獣・スタークロッサー、起動…》

霊玉の間

君達は霊玉の間へと向かった。
鳴り響く警告音は、君達に否が応でも焦りを抱かせる。

(※GMメモ：RP待機)

そうして辿り着いた先、既に臨戦態勢に入ったその魔動機は、施設の指示に従うまま、
君達に襲いかかってくるだろう。

(※GMメモ：RP待機)

対話は不可能だった。

敵：スタークロッサー

君達は、スタークロッサーを撃破した。

施設の声

《対蛮族用召喚獣、継戦能力喪失…。光耀加護防衛プログラム、フェーズ5に移行。
渾玉の間の討神召喚獣を起動します》

(※GMメモ：RP待機)

なにやら聞き捨てならない言葉を聞いた。討神召喚獣とは、一体…。

渾玉の間

君達は、渾玉の間へと急いだ。
しかし通路を走っている最中、何やらおかしい音を聞いた。
なにか、鋼鉄を破くような音だ。

施設の声

《警告。討神召喚獣、沈黙…》

(※GMメモ：RP待機)

施設の声

《機関維持に、深刻な…障害…》

(※GMメモ：RP待機)

君達が渾玉の間に辿り着いたときに、施設の電源が落ちる。

龍姫公

「随分と遅かったじゃないか、暗魂の冒険者…」

そこには、今しがた『討神召喚獣』を喰らった、龍姫公の姿があった。
喰らうというのが物理的なのか、口元が血のように赤い液体で濡れていた。

龍姫公

「ここを動かしていた秘石…、魔力の発生源であるクリスタルも喰らった。この状態の私を、お前たちは止めることができるか？」

(※GMメモ：RP待機)

そう言って、龍姫公は君達を挑発する。

(※GMメモ：RP待機)

龍姫公

「…止められないだろう。そうだ、私は誰にも止められない…」

そう言って、龍姫公は得物を君達に向ける。

既に臨戦態勢であるようだ…。そんなときだった、天井をぶち抜いて、見慣れた影が飛び降りてきたのは。

ぐさり、と地面に刀が突き刺さる。

エクセリア

「…やはり逃がしたか」

(※GMメモ：RP待機)

そのとき、酷い頭痛と、胸の痛みに苛まれる。

(※GMメモ：RP待機)

それを、エクセリアが見ることはなく、彼女はただ、眼前に立つ者を狩ること、ただそれだけに専念していた。

一方、君達はというと…、光の失われた光の加護の魔法陣の中央に立っていた。そのうち、紫色の光が、君達から伸びていき…そこにかかった楔を、振りほどこうとする。

しばらく経つと、紫色のクリスタルに光が戻り、光を強く放った。

景色が元に戻る…。

そこでは、エクセリアが龍姫公と鎧迫り合いをしていた。

龍姫公

「どうやらお前のお抱えは、光の加護を封じられているようだな。誰の仕業だ？

まあいい、おかげで、私もやりやすくなったと言えるよ。彼らを私の足元に敷くことができるからね！」

エクセリア

「それはどうかな…。お前は少し、見誤っているようだ。

現在の情勢を断片的にしか理解していないことが、お前の行動にとって仇になっていると見た。それは、大きな間違いと言えるだろうよ…！」

それに激昂した龍姫公は、その怒りのままに顕現する。

龍姫公

『この国では龍姫の公こそが全権を担う者…！お前のようなふざけたものに、その玉座は合わないと思え！』

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「知ったことか。お前に全権を委ねられない者のほうが多かっただけだ。この事実を、承諾してから逝くんだな。ハイデリンの力、使いこなしてみせる…！」

エクセリアはその手に光を湛える。

そうして強く放った光は、闇喰竜を一撃で戦闘不能に追いやった。

龍姫公

「なに…！？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「まさか、この程度の光で顕現が解けるとは…。龍姫公、お前…、いよいよ以て、おかしくなりやがったか？まあいい、こちらにとっても不都合らしい不都合がなくなる」

龍姫公

「ほざくな…下郎…！」

(※GMメモ：RP待機)

怒り狂う龍姫公を見て、エクセリアは咄嗟に得物を変える。

結月では受け止められぬ、なればこそ、破神の剣を、現代の技術で鍛え直した『絶なりし機工城の大剣』で受け止めるのだと。

両者の剣がぶつかり合い、耳が壊れるような音が鳴り響く。

エクセリア

「ここから先は私の物語ではない…！」

フェニックスの翼で龍姫公を振り払い、なおかつ、彼女の土手っ腹を蹴り飛ばして後退するエクセリア。

エクセリア

「これ以上は埒があかないな。そこで悶えている」

君達に振り返り、脱出を促しつつ、エクセリアは渾玉の間を出る。

まだ、混乱は続きそうだ。

民意に問う

帰還後、エクセリアは議会に顔を出した。

エクセリア

「今回の議題は最近活動が報告されている、龍姫公についてだ。知っての通り、龍姫公と闇喰竜が、この龍刻の各地で見られている。

私は、ここで敢えて、民意に判断を委ねたいと思っている。言わなくても分かると思うが、彼女はヴァルマーレに対して異様なほどの憎悪を持っている。彼女の憎悪が、戦争という選択肢を選ばせるほどに。だが敢えて、私は民に判断を委ねたい。

龍姫公の政策のほうがよかった、という意見も聞くからな」

そう言って、議会に国民投票の準備をさせた。

エクセリアが《隠れ家》に帰還すると、案の定エミリアの膝に倒れかかった。

エミリア

「あああああああ…、あああああああ……………！」

旅はまだ、終わらないようだ。

報酬